

## 新莊川プログラム スタートアップ・ワークショップを開催

平成 21 年 10 月 30 日（金）午後から 31 日（土）午前にかけて、津野町の酒蔵ホールにおいて、地域連携機構として最初の本格的実践企画となる新莊川プログラムのスタートアップ・ワークショップを開催した。

参加したのは、須崎市、津野町、中土佐町、梶原町の行政責任者・担当者、および地域活性化に関わる地元関係者、ならびに高知工科大学地域連携機構メンバーなど 30 名である。

今回のワークショップでは、4 つの自治体にまたがる流域経済圏、広域交流軸を想定した仮説的な枠組みを提起し、その具体的な展開に向けた第一歩として、関係者の相互理解と、志の共有を図ることをねらいとした。

### ◆第 1 部：工科大研究シーズ・研究室紹介（30 日 13:30～16:00）



最初に、新莊川プログラムの対象地域の活性化にとって大いに参考となるヨーロッパの事例について、9 月に現地視察を行った地域活性化研究室より 2 件の報告を行った。

#### ○地域活性化研究室 永野正展教授「植物系エネルギーの活用/ヨーロッパ事情」

木質ペレットの利用が進むヨーロッパのエネルギー事情や、バイオマス活用で貧村から一転豊かな村となったオーストリアのギュッシングの事例などについて報告した。

#### ○地域活性化研究室 松村勝喜教授「ジオパークによる地域活性化/オーストリアの事例」

特異な地質や地形、その上に歴史的に形成された文化景観なども含めて保全と活用を図る

ユネスコのジオパーク。その具体例としてオーストリアのカンプタールの様子を紹介した。

次いで、連携研究センターの5つの研究室から、とりわけこの地域にかかわりの深い研究シーズや、進行中のプロジェクトなどについて報告を行った。

○バイオカーボン開発研究室 坂輪光弘教授「炭の高度利用」

おがくずを固めた高密度炭や、古新聞を溶かして整形した炭の鉢などの活用について実物の展示もまじえて紹介した。このための炭化炉は津野町の稲田建設の土地に設置されている。

○知的認識システム開発研究室 竹田史章教授(代理：佐藤公信助教)「野菜選別装置について」

高度な画像認識を機械制御に結びつけたシステムの実例として、米の鑑別やイリコの選別など動画で紹介し、ピーマンの収穫後の自動等級分けシステムへの応用について提案した。

○ものづくり先端技術研究室 松本泰典講師「スラリーアイスの活用」

氷の微粒子がシャーベット状に一樣に分布するスラリーアイスの効用について、おもに魚の鮮度保持という点から解説し、中土佐町で既に行われている取り組みを紹介した。

○地域情報化サイクル研究室 菊池豊教授「地域情報システムの活用」

東京に出張中の菊池教授が、会場の岡村助手との間でパソコンによる簡易TV会議システムを組んでリモートプレゼンを実施。WEBカメラを使った観光、防災、農業支援などの地域情報化の取り組みについて紹介した。

○地域ITS社会研究室 熊谷靖彦教授(代理：岡村健志助手)「地域ITSの活用」

情報通信などあらゆるソフトウェアを道路交通の改善につなげるITS(Intelligent Transport Systems)の地域応用について、中山間狭隘道路の対向車接近表示システムなどを例で紹介した。

◆第2部 自治体施策紹介(30日 16:00~17:30)

4つの自治体の担当者より、それぞれ地域の特徴や重点的に取り組んでいる活性化施策などについて紹介いただいた。

○須崎市 細木忠憲・企画課長、吉本加津代・企画課商工観光係長

高速道路の須崎終点が近く延伸されるにあたり、まち全体をサービスエリアに見立てて観光サービスなどの充実を図る施策や、自然エネルギーの活用を推進する施策などについて説明いただいた。

○津野町 平井尋・企画調整課長

今回の会場となった酒蔵ホールが有志の発案にもとづき再生利用された経緯や、地元の廃

校を活用し地域住民の集会場・県外客の宿泊用として整備してきた農村交流施設「森の巣箱」などを紹介いただいた。

○中土佐町 竹邑安生・企画課長補佐

「土佐の一本釣り」の漫画の舞台となった町として、「鯉乃國」をテーマに進められて来た観光開発・まちづくり施策などを紹介いただき、今後の地域の資源や素材を活かした町おこしの展望を説明いただいた。

○梶原町 大崎光雄・総務課長

「環境・健康・教育」を基本理念とする町づくりの指針と、それを担う住民主体の取り組みについて紹介いただくとともに、今回集まった四つのまちの共通性を基盤として、海と山の異質性をつなぐこれからの展開への期待を語っていただいた。

◆第3部 参加者自由討論 (31日 9:00~12:00)



2日目は、本学、地域活性化研究室の永野正展室長の司会により参加者の自由討論が行われた。須崎市の笹岡豊徳市長からは、新莊川に過剰繁殖する葦の資源化利用の智慧がほしいという地元の切実な課題も紹介された。津野町の池田三男町長は、地域の課題として高齢化にともなう介護の問題をあげ、また様々な地域の課題をぜひ現場に来て、見て、考えてほしいとの発言があった。梶原町の中越武義町長からも、大学からぜひ地域に学生を送り込んで地域を直に学ぶ方策を考えてほしいという要請があり、また、CO<sub>2</sub> 排出権取引やエネルギー問題などの大きなテーマに地域発で取り組む必要性も指摘された。

地域連携機構事務室から、機構としての新莊川プログラムに対する考え方を資料（←クリック）

にもとづき説明し、地域活性化の目標・理念や、プログラムの進め方、全体枠組みなどについて参加メンバー全員からの同意をいただいた。

今後、地域連携機構は、それぞれの地域が主体となる個別のプロジェクトを進める一方で、それらの成果の共有化をはかるための人と情報のネットワークづくりを支援していくこととしたい。

(文責:地域連携機構事務局)